

地形 亀の姿に例える

文人の
武蔵野

三浦朱門は、その著書「武蔵野ものがたり」(2000年)のなかで、武蔵野の地形を爬虫類の亀の姿に例えています。

まず、山手線よりも東側の都区部(旧東京市内)を亀の頭に見立て、三多摩を中心と

三浦朱門 ⑫

する東京都下と埼玉を甲羅の部分としています。「その尻の部分は立川あたりであろう。それより西になると、丘陵から山になり、武蔵野の背景を作る部分になる」とも述べています。

三浦は「武蔵国」のエリアを意識した地図2葉を「武蔵野ものがたり」の口絵に掲載する一方で、「武蔵野は富士山系の火山灰が堆積した台地である」とも記し、その範囲

三浦の著書「武蔵野ものがたり」。武蔵野で過ごした自身の原体験などもつづられている(武蔵野市で)



を広めにとり曖昧化することも忘れていません。

雑誌「東京人」(2001年2月号)でも三浦は、亀に例えた武蔵野論を展開し、「甲羅の左側が荒川、右側が多摩川」と書いています。北を上

にした通常の地図の見方を採用してはいないようです。亀の頭を上にして甲羅の左右に荒川と多摩川が流れることになり、東を上にした見立てであることがわかります。

「武蔵野の背景」としての丘陵から山になる部分があります。そこから流れる伏流水を源流として多摩川と荒川に分かれ、武蔵野の心臓部を貫く水脈の存在が確認されます。水の流れる、亀のお尻から甲羅を通り頭の方へと向かい、海に注がれていくことになるでしょう。

近代から現代に近くなるに

したが、い都心部が肥大化しますので、亀がどんどん頭でっかちになってきたイメージが湧いてきます。都心部の肥大化にともない郊外が西側へと拡張してききましたので、甲羅の部分も大きくなり、亀全体が成長していることにもなりそうです。歪な成長でないことを願うばかりです。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

＊

過去の連載は、読売新聞オ

ンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

ドから。